

学び続ける学校

別海町立別海中央中学校 校長室便り

発行 校長 青坂信司

第06号 平成27年6月26日(木)

※今日の言葉「成功体験を重ねる学習法は、やる気のない子どもにとって大変効果的な方法です」

「授業の骨格」とは・その2

【第2号からの続き】

- ◆教師は何事かを教える。教師の教えるという行為があって、生徒の学習活動はスタートする。しかし、ここで勘違いしないしてほしいことは、生徒の学習活動が成立することが一番大切なのであって、教師の教えるという行為は、第三者的に見ればどうでもよいことなのだ、ということである。例えば、保護者が授業参観に行ってみるのは、我が子の学習に臨む様子である。きちんと授業に参加できているのだろうか。授業の内容を理解しているのだろうか。意欲的に参加しているのだろうか。こうしたことが優先されるのであって、教師の教え方というのは二次的なものになる。
- ◆ところが、教師という立場で考えると、生徒が授業にきちんと参加したり、授業に意欲的に参加したり、能動的になったりするのには、やはり教師側の教え方に責任があるのではないかと考える。少しでも教え方が適切であるほうが、生徒の授業への参加の仕方も違えば、学習活動のあり方も違って来る。こうして考えてみると、教師の教授活動と生徒の学習活動は一体をなすものであり、表裏の関係にあるものだということがわかる。
- ◆教師が授業を構想する際に大切なことは、常に生徒の学習活動のイメージを持ちながら、より適切な教授行為を模索するということである。教授行為の中心をなすもの、それは教師の言葉である。もちろん教師の言葉以外にも、黒板に書く・生徒のノートを見て回る・指で示す等さまざまな教授行為がある。それらの中でやはり中心をなすのが教師の言葉である。
- ◆教師は、授業時間中さまざまな言葉を発する。昔から、この教師の言葉を適切なものにするために、授業時間中の教師の発した言葉を記録し、分類し、分析することで、より適切なものにしようとしてきた多くの先輩教師たちがいる。教師の授業中に発する言葉は、いくつかに分類できる。第一に「説明」である。「今日は、教科書5ページをやります」「石器時代とは、・・・のような時代をいいます」「今の〇〇さんの意見は、こういう意味でした」などである。第二に「発問」である。教師は生徒に質問を投げかけ考えさせる。「主人公の気持ちが変わったところはどこですか」「江戸時代の特徴は何でしょうか」「開脚前転のポイントはどこですか」「この詩の季節はいつですか」などである。第三に「指示」である。「教科書を出しなさい」「静かにしなさい」「この問題をやってみましょう」「わかる人は手を上げてください」などである。第四に「評価言」である。「よし！いいぞ」「その通り」「違う」などである。第五に「助言」である。「こうしたほうがもっといいぞ」「違うやり方もあるよ」などである。
- ◆「説明」「発問」「指示」「評価」「助言」これらの言葉が組み合わせられながら授業は展開していく。そして、これらの教師の言葉は、出会いの時期の4月の段階と別れの季節の3月では違って来る。当然、学年によっても違って来る。極端な話、子どもに学び方が身に付いてくると、教師の言葉は少なくとも授業は成立するようになってくる。ほとんど教師が話さなくても、子どもたち自らの力で授業を進められるようになってくるのである。ある教師の授業の冒頭である。「今日は漢字スキル10ページ。いつもどおりやります」その教師の言葉で、生徒たちは黙ってやり始める。この言葉には、教師の指導言がいくつも省略されている。省略しても、生徒たちは学び方を知っているので自分の力でやり始めるのである。【次号に続く】